

# はくぶつかんの 部屋 4 ～近世琉球と宜野湾～

もありました。

首里王府がまとめた正史『球陽』や『琉球国由来記』には、1644年、尚賢王の頃に普天間参詣が始まったと記録されています。参詣の目的は、9月が凶月とみなされていたことと、神仏を尊信していることを薩摩に示すためと考えられています。薩摩藩の藩主・島津氏が真言宗系の寺を祈願所としていたことで、王府もそれに倣った、いわば王府の宗教政策の一環だったのです。

首里城を出発した国王らは、浦添間切（間切は今でいう市町村に相当）の経塚・安波茶・仲間・当山を経て、宜野湾間切の嘉数・宜野湾・神山・新城後に宜野湾並松が植え付けられる街道を通じて普天間権現へ詣でていました。

このような国王や王府役人の参詣は、やがて周辺地域に住む民衆にも広がり、9月にお参りする習慣や、

10月に入り、朝夕は涼しく過しやすい季節になりました。今年の10月は、旧暦では9月になりますが、今から367年前のこの時期、琉球国王が家臣を引き連れて、普天間権現をお参りした時期で

文化的影响も与え、人びとの生活の中に溶け込んでいきました。さて、市立博物館では、11月2日（水）から特別展「近世琉球と宜野湾」を開催します。1609年の薩摩侵攻から62年後、1671年に宜野湾間切が新設されました。その近世琉球の宜野湾をテーマに、間切設立の経緯や制度、普天間参詣、宜野湾並松、人びとの生活等について紹介します。文化の秋のこの時期にぜひ、ご覧ください。



▶宜野湾並松（普天間）



▲普天間参詣のジオラマ（市立博物館）

## ■特別展「近世琉球と宜野湾」

会期：11月2日（水）～12月25日（日）

※火曜・祝祭日は休館（但し、11月3日文化の日は開館）

## お問い合わせ

市立博物館 ☎870-9317

茶

ぐわーゆんたく

90

## 察度王と鉄伝説

察度王の出身地である宜野湾には、黄金宮や森川公園など察度王ゆかりの場所や伝説が多く残ります。琉球の王様として初めて中国と公式に交易した功績や、天女伝説、黄金宮と黄金にまつわる話などが伝わりますが、次のような話もあります。

察度王は鉄を積んだ日本商船が来航すると、黄金宮でとれた黄金と鉄を交換し、農具を作り農民に分け与えたので、農民の支持を得て王になったと伝わります。鉄がほとんど採れない沖縄で、堅い石ころ混じりの赤土を木や石の農具で耕すのは大変で、鉄の農具は重宝されたことでしょう。琉球を統一した尚巴志王や、第二尚氏開祖の尚円王が鉄に関する伝説を持つことも偶然ではないかもしれません。察度王の時代に鉄の農具を作った鍛冶場だと伝わるのが、大謝名のカンジャーガマ（鍛冶洞窟）です。

教育委員会の発掘調査では、察度王との直接的な関係はみつかりませんでした。鉄を熱する炉など王国時代の鍛冶場の跡が発見されています。

時代は下り沖縄県となっても、村民のほとんどが農業で生活していた宜野湾（村）では、鉄の農具は重要で、戦前、そのよう

な鉄製品を作る鍛冶屋が、普天間、野嵩、宜野湾などで確認されています。鍛冶屋は鋤や鎌などの修理も請け負ったので、数十年間使い込まれた農具もありました。現在も自動車や建築物、家電製品など、鉄は私たちの身の回りに数多くあり、鉄が無ければ生活できません。普段意識せず利用している資源の歴史について、考えるのも面白いかもしれませんね。

（文責 金城 良三）

カンジャーガマ入口▶  
（大謝名・1996年）



◀鍛冶屋の制作した農具  
（市立博物館所蔵）

## 「宜野湾市史」へのお問い合わせ

教育委員会文化課 ☎893-4430